

「いじめ」発生メカニズム ー「イメージ・ダイナミクスモデル」の適用ー

田中 美子
(千葉商科大学)

【要旨】

「いじめ」が社会問題となって久しい。本論文では、「いじめ」発生メカニズムについて、「イメージの自己組織化」によって「いじめ」が助長されるという視点から考察する。また、「いじめ」を一種の合意形成過程と捉えて、地域イメージの形成過程を説明するために提唱した「イメージ・ダイナミクスモデル」を適用し、「いじめ」が発生していく機序を記述した。また、全国20歳以上の男女2000人及び大学生を対象とした「いじめ」経験に関する2種類のアンケート調査を実施し、本モデルが稼動する要件として、閉鎖的な空間の中での「付和雷同」・「規律・結束」の因子が抽出された。この「集団の同質性」及び「閉鎖性」は、生涯学習社会において学習グループ・サークルの形成や既存の学習団体等の活性化を促進し、学級集団における人間関係構築の方向性を検討するために、重要な要件である可能性を述べた。

1. 本研究の目的

従来のいじめに関する議論では、「いじめっ子」や「いじめられっ子」本人の外見や容姿等個人的特性や家庭環境、学校側の要因等の属性にその原因を求めるものが多かった。確かに、「いじめ」がなぜ発生したのか、その現象を構成する要素を究明する立場は重要である。しかし、本稿では「いじめ」を一種の協力現象であると捉え、この現象に要素還元論的アプローチではなく、円環的連鎖を内包したシステム論的アプローチを試みる。さらに、ポジティブ・フィードバックに基づく「いじめ」発生メカニズムの「イメージ・ダイナミクスモデル」を提唱し、生涯学習社会において重要な課題のひとつである、新規の学習グループ・サークルの形成過程や既存の学習団体など集団の活性化を促進するために資する可能性を探る。

2. 「いじめ」を捉える視座ー「イメージ・ダイナミクスモデル」と諸概念の整理

「いじめ」を逸脱行動とみるならば、その対極に位置する社会学的な意味が付与される「規範」は、法律や慣習などのように抽象的に存在するだけでなく、日常生活のなかで相互に繰り返されている反作用のなかにある。デュルケームは、集団内で個人が問題行動に走ろうとしたときにこうした反作用が適切に働く状態を「正常」な状態とよび、これが適切に働かない状態を「病理」と考えた。ここでは、「いじめ」をこうした逸脱行動の視座から捉え、基本的な概念を整理する。次に、「いじめ」発生メカニズムに自己組織性の概念を導入する。元来自然科学において議論されてきた自己組織性は、システム科学から社会科学へと波及し、これに基づく社会理論を構築する動きがみられる(今田, 1986)。自己組織性とは「システムが環境との相互作用を営みつつ、自らの手で自らの構造をつくり変えていく性質を総称する概念」(今田)である。筆者は、この自己組織性の概念に着目し、地域イメージの形成過程を説明する「イメージ・ダイナミクスモデル」という理論的枠組みを構築し、この実証を試みた(田中, 1996)。これは地域内のイメージが、外からの評価の影響

響を受けつつ、内部の構成要員に共有された優勢なイメージとなり、アイデンティティとして確立していく、とする理論である。このイメージ共有過程と、これを促進する触媒的存在が「いじめ」を解き明かす鍵になると考えられる。

2. 1 「いじめ」の概念規定

森田(1986)の定義を踏まえ、ここでは、「いじめ」を「同一集団内の主体間の相互作用過程において優位に立つ一方が、集合的に、他方に対して反復・継続的に精神的・身体的苦痛を与える行為」と規定する。ここでいう優位―劣位の関係は、必ずしも集団内において不変的または固定的なものとみなさない。かつての「いじめられっ子」が「いじめっ子」に転じるという現象は、多くの既存調査からも確認されている。

2. 2 ラベリング論と「負のアイデンティティ形成」

非行や犯罪など社会病理を取り扱ったラベリング論は、以下の2つに要約できる(徳岡, 1987)。
①セレクトティブ・サンクション：人が逸脱者というレッテルを貼られるのは、逸脱行為ゆえというよりも、社会的マジョリティによって定められた同調・逸脱に関するルールが恣意的に適用されたためであり、社会的弱者に対し適用されやすい。
②アイデンティティ形成：人は他者によって逸脱者というレッテルを貼られ、逸脱者として処遇されることにより、逸脱的アイデンティティと逸脱的スタイルを獲得する。私たちは日常生活の中で、絶えず他者に対してある種の評価をしているが、これが行為者の具体的行為と正確に対応しているかどうかは疑問である。これはイメージと実態の乖離の問題に相当する。他者に対する評価はイメージである。実際、逸脱行為を行いながら社会的には認知されず、ラベルの回避に成功している「隠れた逸脱者」は多いし、一方で逸脱行為をしていなくても社会的に濡れ衣を着せられている場合もある(徳岡, 1987)。ラベリング論者は、逸脱を絶えず行為者と他者との相互作用、関係の在り方との文脈で理解しようとするため相互作用学派と呼ばれ、特に行為者そのものに焦点を当てる伝統的実証主義者との差異を鮮明にし、「他者の反応」を強調したところから社会的反作用学派とも呼ばれる。この行為者自体よりも「他者の反応」との相互作用によって「いじめ」発生メカニズムを探ろうとする本研究の立場から、イメージ・ダイナミクスモデルはラベリング論の視点も内包する。

Becker, H. (1963)によれば、逸脱は行為の性質よりも寧ろ他者により課せられた制裁が「違反者」に適用された結果である。この視点から、「いじめられっ子」の偶発的行動自体が問題なのではなく、たまたま他者によって「いじめられっ子」のイメージを共有された結果が、集団からの制裁として「いじめ」につながったと考えられる。

2. 3 文化的逸脱と「いじめ」

非行原因を社会解体による社会的統制の弱化にあるとした社会的統制理論は、シカゴ学派によって1930年代に主張された。社会学的決定論の中でも文化的逸脱を強調する理論では、逸脱行為は、社会全体では容認されていないが身近な内輪の集団では是認されている下位文化に同調する行動である、と考えられる。人々が逸脱者とされるのは、偶然自分が帰属している集団において同調している文化が、より上位の社会規範と異なるために生じる葛藤や下位文化相互の葛藤が原因である、とする文化葛藤理論は、「いじめ」が生起していることを目撃した集団の個々の要員が、この「いじめ」現象に同調していく状態を説明する本研究に示唆を与える。「いじめ」がよくないということは、上位の社会規範のひとつであるが、自分の帰属集団の同調している文化が、不幸にして「いじめ」に同調してい

る場合、「いじめ」への参画者を増やしたり、「いじめ」を容認せざるを得ない傍観者を作り出す。多くの場合、抑止力が働かないのはこうした上位の社会規範と身近な集団との「規範」が異なり、同調しなければ自分の立場が不利になると構成要員が考えるからである。

2. 4 準拠集団と規範・逸脱

次に、個人が帰属する集団の「規範」と逸脱について考えてみよう。

学級集団や職場のように、集団の構成要員が対面的に相互作用を繰り返す場においては、個人は帰属する集団の「規範」や「ルール」に則って行動しようとする。学級集団や職場は、その構成要員である個人にとって、一定時間以上存在することを義務づけ、またその中で「規範」を強制的に押し付けられる。もし、個人がその所属する集団を自分の準拠集団（自己の態度や判断の形成と変容に影響を及ぼす集団）と認めれば、その個人の態度は集団規範が示す水準の方向に変容する。すなわち、成員は集団への適応ができていないか、さらに「状況にふさわしくふるまっていると、周囲の人に見えるようにふるまっている」かどうかという、他者の目を考慮したイメージが重要な関心事となってくる。

このような場での「逸脱」は、集団から何らかの形で制裁を受けることになる。「いじめ」はその形態のひとつである。このように考えると、「いじめ」は必ずしも学級集団や学校社会に固有のものではないことがわかる。個人が所属する集団に帰属意識をもっている場合には、職場や宅宅などの小さなコミュニティにおいても生起し得る現象である。

2. 5 集団の同一化、イメージの共有と同調

(1) 「状況の定義づけ」の共有

役割が未分化な集団においては、個々の構成要員が「状況の定義づけ」を行っている。状況の定義づけは、個人の意志を行動に移す際に準備されるもので、個人の頭脳の中に形成される情報の構図でありイメージである。このとき、成員間相互が集団状況を主観的な仕方、個人のもつ知識や情報量をもとに独自の私的な状況の定義づけを行う。この私的な状況の定義づけは、成員間の相互作用が繰り返されるうちに、多くの成員間で共有された定義づけに変更されていく（竹川, 1993）。こうして状況の定義づけにより内面化されたイメージは、さらに多くの成員に共有され、集団全体のイメージとして安定化していく。ここで集団規範としての「状況適合ルール」（Goffman, E., 1963）が生じるのである。

「状況適合ルール」とは、集団状況が、状況の定義づけの共有化によって安定してくると、それまで無秩序にふるまっていた成員の行為を規定する圧力となる。

このルールは、集団内で形成される共通の規範のイメージであるが、このルールからの違反は成員間で敏感に看守され、何らかの形で制裁行為が、他の成員によって実行されることになる。この形態のひとつに「いじめ」があると考えられる。このルールは、前述のように必ずしも上位の規範と合致しない場合もあり、集団内の個人は多分に他者の目を気にした態度やふるまいをし、同調・付和雷同的な行動様式を採るようになる。

(2) アイデンティティ形成と他者との関わり

筆者は、地域のアイデンティティを規定する際に「うちとそとを区別する共通認識」という概念を用いた（田中, 1996, 1997）。地域を「自己」と捉えた際の他者、すなわち地域外の評価は、イメージ形成過程及びアイデンティティ形成において極めて重要である。

同一性形成には他者の存在が必要であり、他者との関係において自己が現実化される（Laing, R. D. 1961）。また、Alexander, N. and Rudd, J. (1981)は「状況化同一性」が人々の

間に形成され、ある集団状況を一般化・単純化して、他者が行う多様な行動選択に関する予測を可能にする、と主張した。このような状況適合指向から、集団への同一性感覚が生じ、自己の外観などもその場にふさわしく整えようとする意識が働く (Goffman, E. 1963)。

(3) 「いじめ許容空間」

集団内で発生する「いじめ」を考察するにあたり、竹川 (1993) は、学級集団の雰囲気が一元的な空気に染まり、「いじめ」を許容したり傍観したりする雰囲気に陥っている状況を「いじめ許容空間」と呼んだ。前述のような集団内で形成された状況適合ルールに反する者に対する制裁感覚で、「いじめ」が行われる場合がある。このような「いじめ」は異質なものの排除であり、集団における微妙な差異性がきっかけで表出する攻撃的行為である。この微妙な差異が成員の集団への同一化状況を妨げる、と認識されたときに発生する。状況適合ルールはフォーマルに規定された「規範」と異なり、罰則規定が定められていないので、このルールからの逸脱に対する制裁は「いじめ」という形でインフォーマルに行われることになる。この集団内の凝集性が高いほど、すなわち成員の準拠集団への帰属意識が高いほど、同調性は高まり、「いじめ許容空間」と化す可能性が高い。

3. 「いじめ」のイメージ・ダイナミクスモデル

3. 1 双方向的な因果関係と「いじめ」におけるポジティブ・フィードバック

双方向的な因果関係には、Wiener が着目したような均衡維持的システムに導くネガティブ・フィードバックと、Maruyama(1963)が着目した、相互に原因となりながら元の状態から離れていくポジティブ・フィードバックがある。ポジティブ・フィードバックとは、本来工学的な用語で日本語では「正帰還」といい、回路において出力が入力に戻ることをいう。この入出力の関係のように、構成要員の集団への状況適合性が時間的経緯により増幅していくことを、ここでは逸脱増幅過程という。Myrdal G. (1944)は、黒人問題分析の方法として白人の差別・偏見と黒人の生活水準という2変数間の相互作用が無限に繰り返される中で問題が深刻化すると考えた。Myrdal がこの螺旋状に変化する動的原因論の立場を、「悪循環」ではなく「累積効果の原理」と敢えてニュートラルに命名したのは、変化の方向が価値的にいずれの方向にも作用し得るからである。Myrdal はこの原理が、より広範な社会関係にも適用でき、社会変動の研究に主要な理論的武器になり得ると主張した。

「いじめ」は、人と人との相互作用過程で生まれる現象であり、多くの要因の円環的連鎖として理解できる。筆者が提唱した「イメージ・ダイナミクスモデル」は、地域活性化に資するイメージの自己組織化を基礎とした理論である (田中,1996) が、変化の方向を否定的なものと捉えれば、「いじめ」という社会病理発生機序の記述の可能性を示唆する。

3. 2 調査の方法と結果の分析

(1) 調査の方法と分析の視点

可視性の低い「いじめ」の構造を明らかにするため、「いじめ」は「ポジティブ・フィードバックによるイメージの自己組織化」によりエスカレートし、ある集団内で優位な感情や行動として発展していく、という仮説を設定し、協力現象的な合意形成モデルとして捉える。また、このモデルの妥当性を検討するため2つのアンケート調査を実施した。調査Aは、全国20歳以上の男女2000人を対象とし、層化2段無作為抽出法により1999年1月に実施し、調査Bは、早稲田大学、立教大学、川村女子大学の学生1050人を対象とし、1999年3月に実施した。

本研究では、「いじめ」は誰にでも起し得るという偶発性の前提をとる。確かに、いじめられやすい外観や体格、性質を統計的に調べることは可能であり、有益な立場であろう。しかし人間はすべて同一の外観では有り得ないし、その能力や性向が個性である。また統計的データが示すように、かつての「いじめられっ子」が「いじめっ子」に転じたり（図 1, 2）、現在「いじめられている」一方で同時に別の場面では「いじている」という児童生徒が少なくない。このことは、「いじめられやすさ」の指標を作成するよりも、その境界の曖昧さが何に依拠しているのかを考察する方がより有効であることを示唆する。そこで、システム論的に「いじめ」の円環的連鎖の仕組みを探る。

（2）系の閉鎖性

昔の「いじめ」と現代の「いじめ」の差は、その「閉鎖性」にある。かつては子どもにとって学級集団のみが帰属集団ではなく、帰宅後は地元の学年の違う子ども達と遊ぶこともでき、学校は地域やコミュニティに密着した存在であった。従ってクラスでいじめられても「逃げ場」があった。かつての「ガキ大将」の存在が消えてから、「いじめ」は陰湿になったという指摘もある。しかし現代では、学校ではクラスで行動することを強制され、一定時間以上同一集団の中で過ごさなければならない。この選択肢の少なさが、「いじめ」をより深刻なものとし、被害者の閉塞感を強めると考えられる。

年齢別にみると 30 代以下で「いじめ」経験者が 40 代以上に比べ急増する（図 1）。これは 1960 年代以降の出生集団である。これを大学生に限ると全体の約 7 割が何らかの形で「いじめ」に関わっている（図 2）。また、凝集性は閉鎖性の強さにつながり、集団としてのアイデンティティは強固なものとなるが、これはまた、集団における微妙な差異を排除するという排他性にもつながる。「いじめ」が学校やクラスの規模によらず発生することを既存調査は示しているが、規模よりも可視性の低さ、系の閉鎖性に問題があると考えれば、「うち」の中でのポジティブ・フィードバック機構が強く働くことが理解できる。

（3）「負のアイデンティティ」形成過程

潜在的および顕在的な「いじめ」発生の過程は、その方向性が否定的であるものの、イメージ形成における地域アイデンティティ確立への過程と等価性を指摘できる。すなわち、「いじめっ子」・「いじめられっ子」としてのイメージを集団の構成要員が共有していく過程は、イメージ・ダイナミクスモデルによる影の部分に焦点を当てたもので、「負のアイデンティティ」形成過程である。「いじめ」を抑止する作用は機能しにくく、集団への同一化に基づくポジティブ・フィードバックによって集団内における「いじめ」現象が構成要員の間で優勢となり、行動の同調性を生み、「いじめ」の逸脱増幅を通して「いじめ」の実態はさらに深刻化していく。これを「いじめのイメージ・ダイナミクスモデル」と呼ぶ（図 3）。

3.3 「イメージ・ダイナミクスモデル」による「いじめ」発生のメカニズム

次に、「いじめ」がどのように発生し、どのように顕在化していくのか、深刻化した事例の根底に共通する現象について、ヒアリング調査（調査 B 対象者のうち 23 名に面接）の結果を踏まえ、「いじめのイメージ・ダイナミクスモデル」の視点から詳細に考察する。

（1）一般的に、「いじめ」る傾向をもっている児童生徒は、自分が他の児童生徒達にとって手強い存在で支持されることを知っており、自信をもっている。「いじめっ子」は、不安感が強く自己主張の少ない傾向にある、標的となる「いじめられっ子」をクラスの中に発見し、「いじめられっ子」が無防備であることに強い優越感と快感を覚える。「いじめられ

っ子」が標的にされるのは、ある偶発的行動そのものやその外観が悪いのではなく、たまたま他者によって微妙な差異を捉えられ、「いじめられっ子」のイメージを共有されたところから、「いじめ」という集団からの「制裁」につながる。

(2) 「いじめっ子」は「いじめ」のリーダー的存在として仲間を求め、標的とした「いじめられっ子」に対し直接的・間接的攻撃を加え、仲間となった児童生徒が「標的」に嫌がらせをすることを楽しむ。直接手をくださなくとも、陰で「いじめ」を指図する人間の存在を児童生徒らも熟知している。これには「いじめ」が発覚した際に自分だけが「いじめ」たのではないという逃げ道を確保する意味もある。多くの場合、「いじめられっ子」はその経験を「みじめで不名誉」なことと感じており、深刻化するまで親や教師には話さない。特に「いじめ」加害者側の親は、殆どその状況を認知していない。

(3) 当初一部の「いじめっ子」が開始した「いじめ」が集団の成員の中で認知され、「状況の定義づけ」が進むと、このイメージの擦りあわせが各成員間で行われ、「状況化同一性」が働く。「いじめっ子」と「いじめられっ子」の境界の曖昧なうちは、成員はできるだけ、自己の外観（例えば服装、髪型、装飾物や持ち物等）をその場にふさわしく整えようとする。こうして集団内で共有されたイメージによって、「いじめられっ子」を直接・間接に攻撃することがその集団における「状況適合ルール」となってしまう。「いじめ」がよくないという上位の社会規範があっても、帰属集団の「いじめ」に同調する文化が「いじめ」への参画者や「いじめ」を容認せざるを得ない傍観者を増やす（図4）。

(4) 「そと」の存在である親や教師が「うち」でのイメージの自己組織化を認知しないうちに、「いじめられっ子」の「負のアイデンティティ形成」が進む。傍観者である児童生徒も「いじめっ子」集団からの報復を恐れ、また「関わりたくない」という意識が強いことから、「標的」とされた児童生徒は次第に集団の中で孤立し、閉塞状態に追いやられていく。

(5) もともと集団内での地位が低い傾向にある「いじめられっ子」は、「いじめ」の実態を知る集団の構成要員にとって、さらに「関わりたくない」存在となる。傍観者も、一緒にいることで集団内での地位の低下や、優勢な「いじめっ子」集団からの非難、攻撃を恐れ、「いじめられっ子」の側になることに対する強い恐怖感を覚えるようになる。

(6) こうして、標的となった「いじめられっ子」は、その集団内では完全に孤立する。そこでその集団が開放系でない場合、深刻な「いじめ」となって、最悪の場合自殺にまで追い込まれることになる。この円環的因果の連鎖は、ポジティブ・フィードバックによって「悪循環」として維持・強化されてしまう。ただし、この「いじめっ子」と「いじめられっ子」の関係は固定的なものではなく、集団内での力関係にゆらぎがある場合には、逆転することもあり得るし、いじめられた経験をもつ者は「し返しをしたい」と思う（図5）。関わった経験がないとする者からも、「いじめはなくなる」という否定的な回答が圧倒的に多く得られた（調査B、全体の77.1%）。

4. 「いじめ」を促進する要因と系の開放の必要性

最後に、「いじめ」を促進する要因を探ることにより、「いじめ」問題解決のための方策を提示したい。調査Bでは、深刻な「いじめ許容空間」となったときのクラスの状況を分析した。「いじめ」を見たときに、他の友達に知らせた、「いじめ」をやめさせるよう注意した、教師や家族に知らせたなど、「何らかの行動をした」のは、全体の24.0%と4人のうち1人に満たない。その意味で、「親・教師」は「いじめ許容空間」の「そと」に置かれ

ている。最もひどい「いじめ」があったときのクラスの状況（構成要員の流されやすさ、規律の厳しさ等）や、親・教師の態度など、29項目を主成分分析した結果、「いじめ」経験群によって「不和雷同」の因子、「規律・結束」の因子が抽出された（図6）。

従って、「いじめ」のポジティブ・フィードバックを断ち切るための方法を検討することが、「いじめ」を抑止する作用につながる。例えば、他のクラスとの合同授業やクラス換え、選択科目の増加、教師や親が閉鎖的空間となった「うち」に積極的に関わるなど、系を開放し、「いじめ」が深刻化しないうちにこの円環的連鎖を断ち切る必要がある。

5. 今後の研究課題—集団の凝集性と学習グループ・サークルの活性化

本稿は、広義の社会の「学習」に関する研究である。本論文では、学級集団という同一集団内の主体間の相互作用過程に焦点をあて、「いじめ」を合意形成過程として捉え、「イメージ・ダイナミクスモデル」の適用が有効であることを示唆した。

一方、「いじめ」の根絶に対して8割弱が否定的であったという結果は、学級集団内の人間関係構築の難しさへの問題提起と同時に、生涯学習社会における重要な課題のひとつである、学習グループ・サークルの活性化への課題に通じる。集団内の凝集性が高いほど要員間の同調性が高まり、「閉鎖性」に起因する一部の既存団体への新規学習者参入の困難さは、生涯学習推進の現場で指摘されている。本稿で分析した「いじめ」発生のメカニズムは、学級集団に限らず、職場や地域でもそこに「系の閉鎖性」がある限り、集団内の「いじめ」にまで至らなくとも同様の構造を有すると考えられる。今後の研究課題として、職場や地域における「いじめ」のメカニズムの分析についてさらに発展させていきたい。

<引用文献>

- 1) 森田洋司・清永賢二『いじめ—教室の病い』金子書房, 1986.
- 2) 徳岡秀雄『社会病理の分析視角』東京大学出版会, 1987.
- 3) Becker, H. *Outsiders*, The Free Press, 1963. 『アウトサイダーズ』（村上直之訳）新泉社, 1978.
- 4) 竹川郁雄『いじめと不登校の社会学—集団状況と同一化意識』法律文化社, 1993.
- 5) Goffman, E. *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc., 1963. 『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』（石黒毅訳）誠信書房, 1984.
- 6) 拙稿「地域イメージの形成過程に関する研究」東京工業大学博士号学位論文, 1996.
- 7) 拙稿『地域のイメージ・ダイナミクス』技報堂出版, 1997, 拙稿『イメージ共有』を指向した生涯学習システムの構築』『日本生涯教育学会年報第21号』, 2000, p.122 参照.
- 8) Laing, R. D. *Self and Others*, Tavistock Publications, 1961.
- 9) Alexander, N. and Rudd, J. *Situated Identities and Response Variables*, Tedeschi J. T. ed. *Impression Management Theory and Social Psychological Research*, Academic Press, 1981.
- 10) Myrdal, G. *An American Dilemma*, Pantheon Books, Vol.1, Vol.2, 1944.
- 11) Maruyama, M. The second cybernetics ; Deviation-amplifying mutual causal process, *American Scientist* 51, 1963, pp. 55-60.
- 12) 今田高俊『自己組織性』創元社, 1986.

（注）図6は、閉鎖的な空間の中での「不和雷同」の因子スコアをX軸、「規律・結束」の因子スコアをY軸とする座標に、特にひどい「いじめ」を受けた（あるいはした、見た）ときの状態について「いじめ・いじめられ」体験の4群別に散布図をつくり、これを見やすくするためにこの4群の各々の平均値と標準偏差を示したものである。

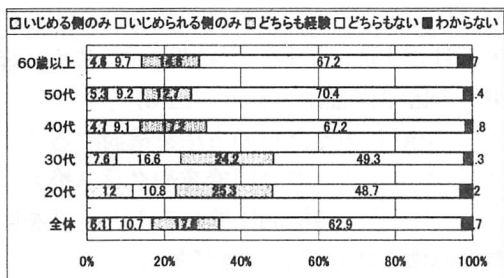


図1 年齢別にみたいじめ・いじめられ経験

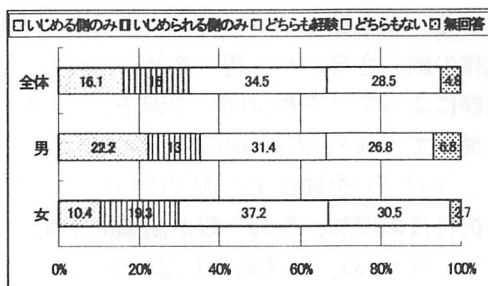


図2 性別にみたいじめ・いじめられ経験

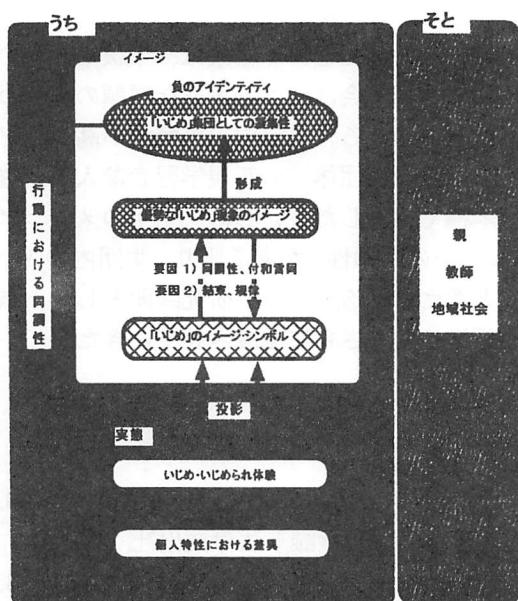


図3 いじめのイメージダイナミクスモデル

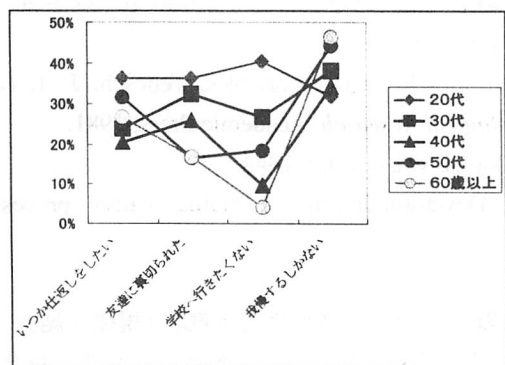


図5 年齢別にみたいじめられたときの気持ち

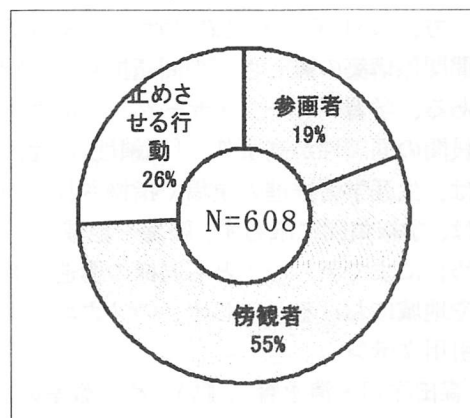


図4 いじめを見たときの行動

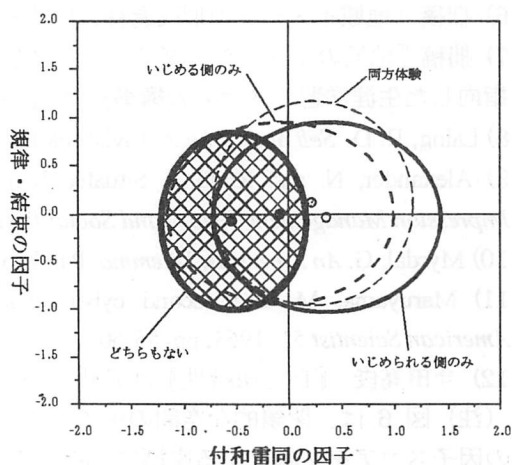


図6 いじめ経験による分布の相違 (注)